

「死に地獄」

古堅元貴

登場人物

飯田将也 (28) 会社員

友部悠輝 (15) 中学3年

サワノ

カン

1. マンション室内(朝)

飯田将也(28)、朝食を食べている。

TVではニュース番組が流れている。

キャスター 「昨夜9時頃、港区のマンションで女優の八代梓さん29歳が死亡しているのが分かりました。事件性はなく、警察は自殺とみて捜査を進めています」

× × ×

飯田、朝食をシンクに片付ける。

× × ×

飯田、スーツに着替える。TVを消し部屋を出る。

テーブルには一枚の封筒。

2. マンション外廊下

エレベーターへ向かって歩いている飯田。

× × ×

エレベーターのボタンを押す飯田。

左の方角、約500m先には母校・海晃中学校が見える。

飯田、中学時代の思い出を懐かしんでいる。

飯田 「？」

中学校屋上に人影。柵を上っている？飛び降りようとしている人影？

飯田 「!？」

エレベーター到着。飯田、中学校の屋上に注視。人影は動かない。

飯田、急いでマンションの階段を下りる。

3. 海晃中学校・校門前

ダッシュしている飯田。中学校の校門に到着。
校門前では用務員が清掃をしている。

飯田 「苛立ち」

4. 同・裏門

裏門にやってくる飯田。門には鍵。辺りには誰もいない。
飯田、門をよじ登る。

5. 校内

飯田、校内を慣れたように移動し、屋上へ向かう。

6. 屋上

飯田、屋上の扉を開け、外に出ると、

飯田 「!?!」

制服を着た生徒・友部悠輝(15)が柵の外側に立っている。

飯田 「(友部に)ちよつ、ちよ!!」

友部 「無駄。もう決断したことですから」

友部、後ろを振り返る。

友部 「…誰?」

飯田 「おれは…近所の。…あのマンションから君のこと見えて。死のう
としてる?」

友部 「見えてもほっとけばいいじゃないですか。関わりのないあなたが

ここへ来て、説得したら、ぼくが死ぬの止めると思いました？」

飯田 「目の前で死のうとしてる人見たら、見過ごせないよ」

友部 「目の前の距離じゃないでしょ」

飯田のマンションは約500m先。

飯田 「(確かに)…。なんで？なにしてるの…」

友部 「死ぬと覚悟した人は、何言われても変わらないです。柵の外側に立った人を助けられるのはドラマ、映画、駅前無料で配ってる薄っぺらい聖書の中だけなんですよ」

飯田 「聖書ってそういうことも書いてあるの？聖書好きなの？」

友部、無視。

飯田 「ええ…待って！」

友部 「出て行って下さい。ここいたら疑われますよ。僕が死んだあと」

飯田 「おれもこの学校の卒業生！47期」

友部 「ぼくが卒業できれば60期生ですけど、そうやって刻まれることはないですね」

飯田 「なんで死にたいの？人間関係？将来？恋愛のもつれとか・・・？」

友部 「違います」

飯田 「じゃあ…」

友部 「違和感」

飯田 「え」

飯田、友部に近づくと

友部 「来ないでください。もう降ります」

飯田、止まらざるをえない。

友部、一歩前に出て、柵から手はずす。

飯田 「おれも死のうと思ってたんだ今日」

友部、止まる。

飯田 「今日こそ。電車で飛び込んで。新卒で5年も働いてるのに、次はコンベアーに乗ってる菓子パンの検品。おれバイトかよ。上司は意見聞かない。周りは他人事。むしろ話のネタになるから面白いじゃんって。面白くねーよ。死にたくなるくらい深刻だよ」

友部 「・・・」

飯田 「知ってる？快速電車で跳ねられると感覚なく死ぬるんだって」

友部 「電車は止めた方がいいですよ。しかも通勤時間。賠償金何百万だし、多くの人迷惑するし。毎朝みんなイライラしてるでしょ。また飛び込んだよって。ぼくたちはまたなんですよ」

飯田 「いやいや、だからって学校も！その後の生徒や先生、それにおれら卒業生がどんなに苦しむか。学校の思い出にいつもおまえの死がまわりつくんだぞ。まだ電車の方がマシだよ」

友部 「何言ってるんですか？」

飯田 「ん？」

友部 「どっちも迷惑です」

飯田 「…ごめん」

友部、柵から手を外す。

飯田 「迷惑がかからない死なんてないんだよ」

友部 「そう考えられるあなたは今、死ぬのを止められたんですか？また明日から会社通えるんですか？」

飯田 「それは…」

友部 「もう満足でしょ。悔いなくてすよね」

飯田 「…おれが、君を止めようとするのはおかしいよな」

友部、手すりから手を離す。見てるだけの飯田。

友部、1歩踏み出す。次の1歩で落ちる。

1歩を出そうとした時、「君じゃない」と声が聴こえる。

友部 「は？」

友部、振り返る。飯田しかない。

飯田 「!？」

友部、再び背を向ける。そして1歩踏み出そうとすると、

サワノ 「意思が2つあったから見つけやすかった」

友部 「？」

友部、振り返る。飯田も振り返る。

飯田の後ろには、中年ぐらいの男・サワノとカン。

飯田 「え…誰」

友部、幻聴ではなかったと理解する。

飯田 「…先生？あ…担任と副担任の・・・」

友部 「誰？」

飯田 「ん、え」

カン 「誰と聞かれると毎度困るんですよねー。僕自身も僕の事をうまく表現できないというか…」

サワノ 「分からないよ、カン君。彼らと話す時は簡潔に。すぐにスマホいじられちゃうよ」

飯田 「あ？」

サワノ 「君らを引き取りに来た」

飯田と友部、硬直。

サワノ 「(飯田と友部に)死のうとしていた」

飯田 「…え、死のうとしてたのはこの中学生。…え!!!?待って!!!? どっから!？」

友部 「おまえら何？」

サワノ 「私たちは君らみたいなの、いわゆる、自殺志願者を私たちの生活圏の国に勧誘する仕事をしているんだ」

カン 「業種で言うと、第3次産業かな」

サワノ 「聞かれていないものには答えない」

カン 「すいません」

サワノ 「謝る必要はない。注意はするけどね」

友部 「国？」

飯田 「え、もしかしてもう死んだ？」

カン 「まだ生きてるよ」

サワノ 「私たちの言う国には、かつて自殺を試みた人たちだけが生活している。今の君たちみたいに、この世界で生きていくことを自ら辞めようとした人たちを、リクルートしてるんだよ」

カン 「僕たちもかつては君たち側だった」

飯田 「・・・は？」

サワノ 「この国の年間自殺者数」

飯田 「はい？」

サワノ 「2万1千人」

飯田と友部、その数に驚く。

サワノ 「だがそれはこの国が把握できた表面の人数。実数はその何倍もある」

飯田 「え？」

カン 「国が把握できていない人達。そして私たちが救った人を含めれば、本来の自殺者、自殺志願者はもっといます。いきなり行方不明になる人、突然自殺と報道される芸能人。いますよね？」

飯田 「ああ・・・」

サワノ 「彼らは私たちの国にいる」

飯田 「は？」

カン 「不自然だと思いませんか？脈絡ないでしょ？彼らはこちら側へ避

難したんです」

飯田 「嘘だあ」

サワノ 「この国、日本の年間の自殺者数2万1千人は最低でも私たちが救えなかった数で、私たちが救った人を含めれば、本来の自殺者はもつといる」

カン 「そしてこの国には自殺しても見つからない人もいるから、それも含めればもつといる」

サワノ 「よい補足」

カン 「あ、え…あざます!!」

友部 「死ぬなって説教？」

サワノ 「説教じゃない、勧誘」

友部 「最後まで、寿命まで生きなくちゃいけない義務なんてあんの？」

サワノ 「ない。だが自死の権利もこの国にはない。なら今の場所から逃げてしまえばいいんだ」

飯田 「今の場所？」

カン 「ここ。さあ行こう、乗って」

飯田 「え？乗って？何に？」

カン 「何て言えばいいかな？地球で言うといすゞのトラックに近いかな。時間はかかるけど、ちゃんと行けるから」

いすゞのトラックはどこにもない。

カン 「仕方ないんだ。ぼくたちは何か、特殊能力とかは全くないからね。いきなりワープとか、口から強力な光線とか、触れずに相手を倒せる人気のフォースとか持ってないから」

サワノ 「宇宙人じゃない。シスでもない」

飯田 「は？」

カン 「…。は？」

飯田 「おまえケンカ売ってんのか!？」

友部 「ほんとにあんのそれ」

サワノ 「私たちの長がこの国の命の衰弱さに見かねて作ったんだよ」

友部 「長？誰だ？」

サワノ 「顔なじみだよ」

友部 「・・・」

カン 「安心して。みんな楽しく暮らしてる。過度な競争も無い。自分を痛めるだけの不必要な労働もない。意思を共有する環境が整っている。ここにいる人たちはみんな同じ想いを知ってるからね」

サワノ 「一度死を考えた奴は、もう死を知らない奴とは生きていけないよ」

飯田 「・・・(友部に)分かる？」

友部 「・・・」

カン 「生き地獄だよ。ここは。捨てちゃえ、こんな国」

飯田 「お、え…は、ああ…」

サワノ 「死ぬくらいなら別の所へ行けばいい」

飯田 「(友部を見て)!!？」

友部、柵をよじ上り、こちら側に来る。

カン 「さあ行こう」

歩き出す友部。

くじく